



Title	エミール・ノルデの「宗教画」をめぐって：モダニズムの内と外、その狭間
Author(s)	清原，佐知子
Citation	大阪大学，2002，博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43318">https://hdl.handle.net/11094/43318</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 きよ はら さ ち こ  
清 原 佐 知 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 6 6 5 5 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 14 年 2 月 19 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学 位 論 文 名 エミール・ノルデの「宗教画」をめぐる  
—モダニズムの内と外、その狭間—

論 文 審 査 委 員 (主査)  
教 授 神 林 恒 道

(副査)  
教 授 上 倉 庸 敬 教 授 罔 府 寺 司 助 教 授 藤 田 治 彦

### 論 文 内 容 の 要 旨

エミール・ノルデは、ドイツ表現主義の画家の一人として位置づけられている。しかしノルデはこの急進的なモダニズムと同時に、その宗教的な感情表現において保守的なナショナリズムと結びついている。そこにノルデの芸術の独自性が認められる。本論文は、この二つの軸の間に揺動するノルデの絵画を、その画業の根幹をなす「宗教画」を中心に論じることで、近代絵画史におけるノルデの新たな位置づけを見出そうとしたものである。論文の構成は三部からなっている。

まず「ノルデをめぐる諸問題」では、先行研究において、このノルデの相互排他性とその仲介の試みがどのようになされてきたかが検証されている。その狭間にあって大きな問題として浮かび上がってくるのが、ノルデの「宗教画」をどのように解釈するかということである。これまで多くの論文は、プリミティヴィズムを媒介として、その保守性をモダニズムの文脈に引きつけて捉えようとするものであった。論者はこれに対して、この当時のゴシック美術受容の状況とからめてその宗教画を分析し、これを通じて「偉大な一匹狼」と称されたノルデの芸術の独自性が解明されるのではないかと説いている。

「ノルデの宗教画とその周辺」では、まずノルデの初期の神話的絵画から、ドレスデンの表現主義者グループ「ブリュッケ」との交流を経て、そこからいかにして「宗教画」が形成されていったか、さらにその宗教画の展開を、モチーフと色彩表現の視点から詳細に分析している。そこから果たして従来の美術史でのノルデの位置づけが妥当なものであったかどうか、それとともに、この時期にノルデの芸術が現実にとどのような形で受け入れられていたのかを、受容史の視点からも客観的に再検討を試みている。

「対立する価値観の狭間で」では、ノルデの芸術の内面により深く入り込み、画家自身の宗教画論とその解釈、さらに表現主義理論とゴシック美術復興論の相補的あるいは対立的関係を論じている。その際に、論者が注目する作品が《エジプトの聖女マリア》である。その分析を通じて論者は、再びプリミティヴアートを通じて、ゴシック的宗教感情の表現がモダンアートへ内面的に繋がっていく可能性を指摘している。

## 論文審査の結果の要旨

ドイツ表現主義の絵画一般、あるいは「青騎士」の画家たち、「ブリュッケ」の画家たちについての研究論文は、わが国においても少なくない。だがそのいずれにも属することのないノルデの孤高の芸術は、その強烈な個性のゆえか、これまで決定的なモノグラフィーが書かれたことはなかった。この論文について特筆されるべきは、これがわが国での最初の、おそらくは唯一のノルデの絵画についての本格的な研究であることである。

ノルデ研究のポイントは、その芸術表現における相互排他性の問題にどのような解釈が可能であるかということである。これまでのノルデ解釈は、ジル・ロイドの研究に代表されるように、表現のプリミティヴィズムを媒介として、その芸術表現をモダニズムの文脈に引きつけて捉えようとするものであった。この視点は、1909年の《最後の晩餐》に始まる一連の宗教画の意義を不当に無視するものである。論者はこの一連の宗教画を整合的に解釈することによって、初めてノルデの芸術の本質が明らかになると考えている。

そのための作業として、この宗教画の作品分析はもちろん、当時の史料を渉猟してノルデの芸術がどのように受容されていたかを、出来るかぎり客観的に論証しようと試みている。その中でも、多様なモチーフの展開とからめてなされた、ノルデの独自の色彩表現についての論者の周到な分析は、きわめて説得力に富むものであり、またこの時期の周辺状況についての報告もまた、これまでにない新資料を提示するなど、ノルデ解釈に新局面を開こうとしている論者の努力は十分に評価することができる。

だがそこに提起された問題を、一步踏み込んで、ノルデ自身の宗教体験あるいは当時の民族主義的な精神運動との関連において論ずる段階に至って、その論理的な構成はよしとするも、実際に宗教画論を展開するに当たっての知識や理解になお議論の余地があり、結果としてそこから導き出される結論に若干不満は残る。だがこれは、論者の今後のさらなる研究の深まりに期待をしたい。

しかしこれまでモダニズムに偏したノルデ解釈に、現代的な視点から一石を投じ、新たな方向性を示した本研究の価値はきわめて大きいものがあると言うことができる。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。